

[参考事項]

新技術名：露地アスパラガスにおけるアザミウマ類およびカスミカメムシ類の発生生態
(平成26～28年)

研究機関名 農業試験場生産環境部病害虫担当
担 当 者 菊池英樹・高橋良知

[要約]

露地アスパラガス圃場において、ネギアザミウマの茎葉および若茎での発生が確認されたが、生育・品質へ影響は見られなかった。ツマグロアオカスミカメ成虫は立茎中の茎先端部の枯死、カスミカメムシ類幼虫は若茎の傷や曲がりに関与していることが確認された。

[普及対象範囲]

県内露地アスパラガス生産者

[ねらい]

近年、秋田県内の露地アスパラガス栽培においてアザミウマ類およびカスミカメムシ類の発生が目立ってきており、収穫物の曲がりや腐敗等品質への関与が疑われている。

防除要否や効果的な防除方法を検討するため、本県における発生状況および品質への影響を明らかにする。

[技術の内容・特徴]

- 1 アスパラガス茎葉において6月～9月に継続的にネギアザミウマ成虫及びアザミウマ類幼虫の発生が確認された(図1)。若茎上ではネギアザミウマ成虫が同時期に確認された(図2)。多数の発生が認められた若茎において穂先の鱗片下にかすり状の小斑点が確認され、吸汁による症状と考えられたが、生育・品質への影響は認められなかった。
- 2 ツマグロアオカスミカメは成虫は茎葉及び草冠部において6月～9月に発生が確認された(図1、図3)。茎の先端部を吸汁している個体が複数観察され、食害痕が多い茎の先端部は一部枯死に至った(図4)。
- 3 カスミカメムシ類幼虫は茎葉では6月～8月に、若茎上では7月～8月に確認された(図1、図2)。発生が確認された若茎では表皮に微小な傷が認められると共に、傷が茎部の伸長により拡大したと考えられる線状の浅い亀裂が認められ、いずれも幼虫の吸汁によるものと考えられた(図5)。
- 4 若茎の曲がりは虫害以外の生理的な要因によると考えられるものが大部分を占めた(表1)。虫害ではカスミカメムシ類幼虫によると考えられるものが最も多く、アザミウマ類によると考えられるものは多発生条件下でも確認できなかった(表1)。
- 5 若茎の腐敗は7月～9月に継続的に確認されたが、無防除区、徹底防除区とも腐敗若茎率がほぼ同様に推移していることから、各害虫の腐敗への直接的な関与の可能性は低いと考えられた(図6)。また、30℃で24時間保管した若茎の腐敗茎率は、無防除区と徹底防除区に大差がなく、現地で問題となっている収穫後に発生する腐敗へのネギアザミウマの関与は認められなかった(表2)。

[成果の活用上の留意点]

- 1 調査は試験場内で実施した。品種はウェルカム、定植時期は2013年9月である。
- 2 徹底防除区では擬葉展開後収穫終期まで概ね7日間隔で殺虫剤を背負式動力噴霧器を用いて200L/10a相当量を散布した。
- 3 防除については秋田県農作物病害虫・雑草防除基準を参照する。

[具体的なデータ等]

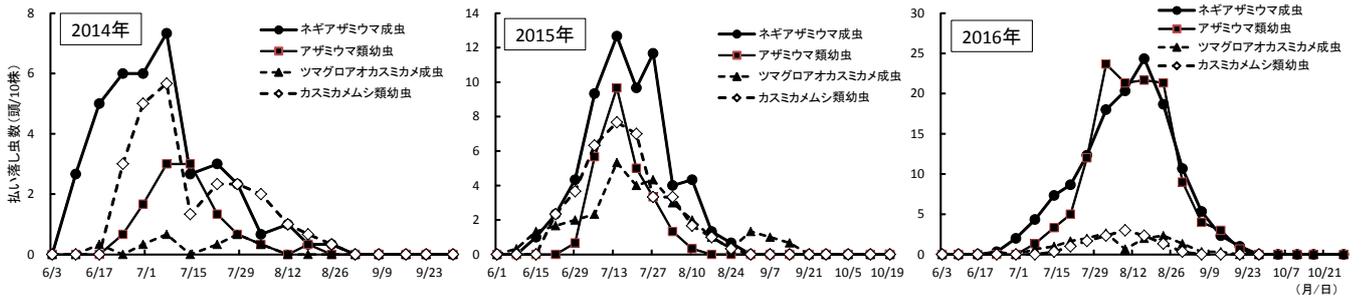


図1 アスパラガス茎葉における虫数の推移

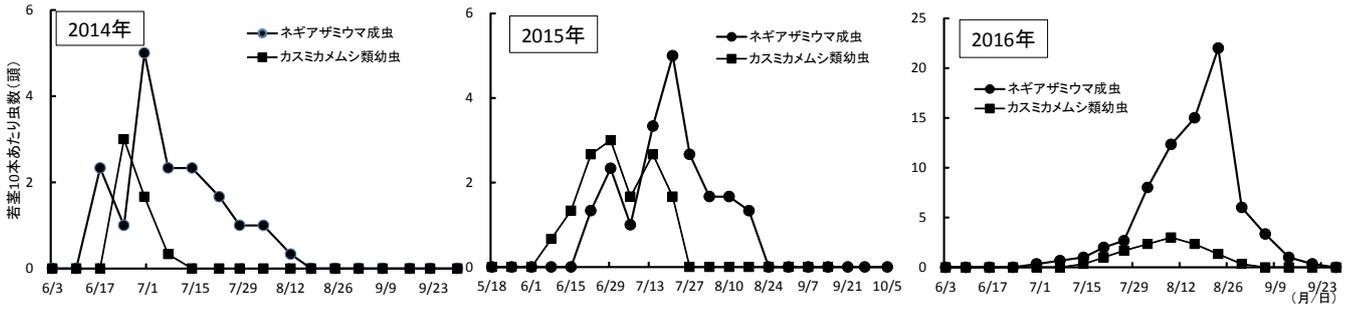


図2 若茎における虫数の推移

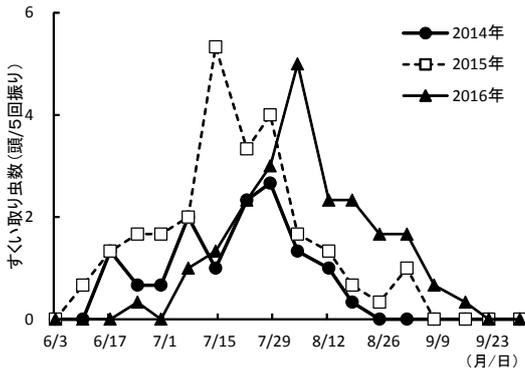


図3 草冠部におけるツマグロアオカシカメ成虫数の推移



図4 ツマグロアオカシカメ成虫の加害による茎先端部の枯死症状



図5 アスパラガス若茎上のカシカメシ類幼虫(左)と食害痕(右)

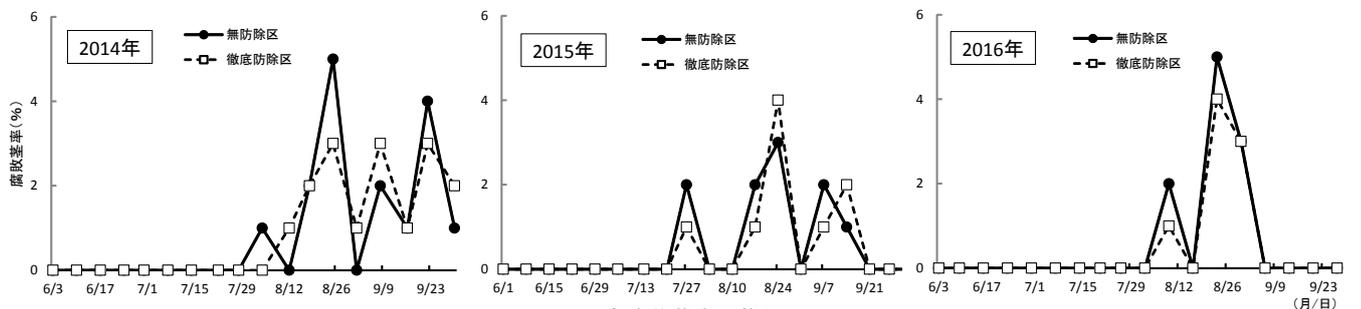


図6 腐敗若茎率の推移

表1 曲がり要因別若茎本数

要因	2014年		2015年		2016年	
	無防除区 (本)	徹底防除区 (本)	無防除区 (本)	徹底防除区 (本)	無防除区 (本)	徹底防除区 (本)
アザミウマ類	0	0	0	0	0	0
カシカメシ類	8	0	11	2	10	2
チョウ目幼虫	6	0	10	0	10	0
シユウシホシクビナガハムシ	0	0	2	0	0	0
ダニ類	0	1	0	0	0	0
その他(生理的要因等)	43	44	114	124	82	78
計	58	45	135	126	102	80

表2 若茎の腐敗状況(30℃、24時間後)

収穫日	無防除区			徹底防除区		
	供試若茎数 (本)	腐敗若茎数 (本)	腐敗若茎率 (%)	供試若茎数 (本)	腐敗若茎数 (本)	腐敗若茎率 (%)
2015年7月21日	10	5	50	10	5	50
2016年7月2日	10	4	40	10	4	40
2016年8月9日	10	8	80	10	7	70
2016年8月16日	10	0	0	10	0	0

[発表論文等]

なし